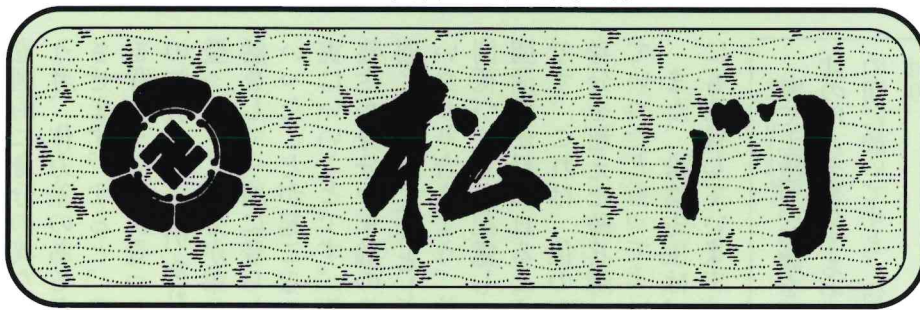




- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

松門は無料配布しています

編集発行 公益財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内
TEL・FAX 083-922-1218

教育者吉田松陰先生に学ぶ

松下村塾「垣塙の中で溶け合うような活気あふれる教学の場」

公益財団法人松風会 理事長 松本 芳之

郷土の作家、古川薫氏は著書の中で松陰先生のめざした教育を「垣塙の中で融け合うような活気あふれる教学の場」と表現しています。何よりも師弟や塾生の間で切磋琢磨しながら学問に励み、活発に討論し合う中で信頼関係を醸成し、「考える力」を求めたと言えるのではないのでしょうか。

ある日、松下村塾に入門のため訪れた若者は、塾内の情景を見て、誰が先生か分からなかったと言います。松陰先生は塾生の輪の中に入り、共に討論したり、一人一人の疑問に対応したりしながら、塾生の傍らに寄り添って居られたのです。また他日、入塾を希望した年少者の二人が「謹んで教えを請う。」と申し出た際には、「教授は能わざるも、君等と共に講究せん」（教授は授けることはできませんが、君たちと共に学んでいきましょう。）と応えたと言います。ここには、松陰先生の共に学び共に成長したいとの師弟同行の教師像を見ることができま

す。以下、松下村塾での教育の一端について、述べてみたいと思います。

一 共に働きながら学ぶ

江戸時代の身分の厳しい封建社会にあって、松下村塾には「来る者は拒まず」の方

針のもと、武士も、足軽も、商人の子もいました。何よりも、塾生同士の信頼関係を大切にした松陰先生は、身分を超えて対等の友人・同志・同友として交流するために、共に働きながら学ぶことを積極的に取り入れました。



松下村塾 松陰神社内（萩市）

例えば安政四年、八畳の塾に十畳半の建て増しをした時など、塾生たちが材料運び、壁を塗り、屋根を葺いて作り上げました。この時の様子を松陰先生は、次のように述べています。

新塾の初めて設けらるるや、諸生皆此の道（誠朴忠実の道）に率ひて以て相交はり、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相勞役すること、手足の如く然り、骨肉の如く然り。

（通釈）「塾の新増築にあたっては、塾生同士がお互いに誠心誠意、真心を込めて協力しながら仕事ができるように留意し、その作業の中で、誰かが病気や困難にあった時には助け合うように、また、力仕事や何かが起こった時には手伝い合うように、お互いが自分の手足のごとく、家族のように協力して作業を行った。」と語っています。松陰先生は、共に一致協力して身体を動かした汗を流す時、お互いの心が一番通じ合うと考えられたのです。共同作業は、増築だけではありませんでした。

ある時は、皆で蚕を飼い、畑を耕し、台唐という石臼で米をつきながらも読書に励みました。また、ある時は、集団で撃剣や水泳、塾外での登山なども行われました。玖村敏雄氏は講演録の中で、村塾では、山に登るといような現在の遠足に似た活動が行われたとして、その様子について「松陰のやる遠足はこうです。

『明日の午後何時にどこその山の頂上に集まれ。』と。これが実に面白いことになるのです。」と述べています。その教育的効果について、次のように語っています。「朝、村塾に集合した塾生たちは、集団で目的の山頂に向かいます。その時、

意図的に身分の異なる者、年齢の違う者、体力差のある者を一緒に活動させます。すると、武士が幼い足輕を背負って山に登ったり、逆に年長の町人に手を引かれて武士の子が登ったり、兄分が弟分をかばい、世話をし一緒に登らねばならないといったことが起こるのです。これは実にいいことです。(概要)。つまり、塾生が身分や年齢の違いに関係なく同じ一人の人間として、助け合い、

いたわり合うよう、塾生同士の間関係づくり配慮しつつ、様々な集団活動が行われるように工夫したのです。これは、後の高杉晋作による身分を超えた騎兵隊へと引き継がれていったと言つてよいでしょう。

また、松陰先生は、自然の教育力にも注目しています。

嘗て王陽明の年譜を読む。謂へらく、其の門人を警発するや、多く山水泉石の間に於いてすと。窃かに其の理に服せり。

(通釈) 「かつて王陽明の年譜を読んだ時に、その門人が啓発され大志を抱くのは、多くは天地自然を相手にして学ぶ時であるとして、その道理に私(松陰)は感服している。」と述べられています。このように、松下村塾では、塾内の学習に留まらず、勤労・運動・自然などの様々な

体験活動を取り入れて、当時としては非常に珍しい特質すべき教育的性格を備えていたのです。

二 ディスカッションのすすめ

松下村塾では、議論・討論を通して、知識を広げたり、お互いの考えを深めたりする教育活動が行われました。

松陰先生が塾生に与えた「諸生に示す」には、

沈黙自ら護るは、余甚た之を醜む。……疑難交々生ぜん。開悟時あり、乃ち同友相資すこと、寧んぞ已むを得んや。

(通釈) 「討論をせずに、沈黙して、自分の中に固く閉じこもろうとするのは、僕がたいへん嫌うところである。学んでいくと、当然いろいろな疑問や難題が生ずるはずである。自分で悟り一定の学力に到達するまでには、人によって時機がそれぞれ異なっている。その間、同友がお互いに質問し合い、討論し合うことは、当然すぎるほど当然ではないか。」と述べています。

また、討論する際の心掛けについて、

講習討論の節、勝つ事を好むの心を持ち、人の議論を排斥し、私の意見を遂げ候儀深く相識むべし。専ら義理を明かにするの心懸け肝要たるべく候事。

(兵學寮提書條々)

(通釈) 「討論する際に勝ち負けにこだわらず、他人の議論を排斥し、自分の意見を無理強いするような態度は深く戒めるように心懸けることが肝要である。」と述べています。松陰先生は討論により、わだかまりが生じることに留意したのです。自分の意見を主張すると同時に、他者の意見に耳を傾け尊重すること

で議論が深くなり、お互いの学びが高まり、相互の信頼関係が一層深まっていくなか考えたのです。このような松陰先生の教育姿勢は、松下村塾での討論・討議を活発化させていきま

した。ディスカッション中心の授業形態は、時には、「一対一」、「一人の塾生が講義し、その議題を皆で討議」、「松陰と塾生が円卓になり意見を出し合う」、「塾生が何組かに分かれて課書を読み、討論し合う」、「年配者が助教格になって討論する」など様々な方法で実施されました。

三 学びを深めるために

松下村塾では、一人一人の長所を引き出す個への指導と、協同社会の一員としての集団指導を、車の両輪とした教育が行われました。そういった中で、培われた討論・討議の特色について、三点を挙げることが出来ます。

① 学びの場での人間関係づくり

に努める。(学びの場に、師弟や塾生同士に壁があり信頼関係がないようでは、活発な討論は期待できない。)

② 子ども

の資質を見極め、長所を見出し、ほめて、生かす。(学びの場に、一人一人の良さを認め合う雰囲気や醸成されていなければ、伸び伸びとした討論はできない。深い学びと思考の広がりは期待できない。)

③ 体験・経験に基づいた討論を推奨する。(体験や経験を通じて実際に見聞きした社会事象、自然事象に基づいた意見でなければ、机上の空論となり、学びは深まらない。)

このような、ディスカッションによる「考える力」を重視した教育方法は、「教え授ける」という一方通行の教え方ではなく、グループ討議や体験学習を通して子どもたちの活用力や理解力を高め深める、現在のアクティブ・ラーニングとも重なるところがあるのではないだろうか。

松陰先生による松下村塾の教育には、時代を超えて現代に参考となる「不易の教育」へのヒントがあるように思えます。

【主な参考資料】

- 古川薫著「松下村塾」「松下村塾と吉田松陰」
- 玖村敏雄先生講演録「吉田松陰の思想と生涯」(山口銀行厚生会)
- 日本経済新聞社「春秋」二〇一八年五月三日



『吉田松陰語録集』拾い読み その一

萩 吉田松陰「松朋会」会長 藤本 和義
(公益財団法人松風会 理事)

吉田松陰の残した膨大な資料には、人生の指針となるもの、読み手に感動や感銘を与えるもの、強烈な生き様が表れているもの等の文章や言葉が随所に見られます。松風会では、吉田松陰研究グループ「萩松朋会」が、平成十五年度に『吉田松陰撰集』から、さらに二十二年度には『吉田松陰全集第三巻・講孟余話』から選定された語録をもとに、『吉田松陰語録集』を書籍として発行しました。二回目の語録集は、初回分

も含めて一冊にまとめられたものです。解説、出典、備考として整理されていて、原文を探る手がかりにもなります。

ここでは、この語録集を拾い読みしながら、いくつかの視点で関係する語録を取り出して、まとめてみることにしました。こういう視点では、こんな言葉があるんだと、改めて整理することができればと思います。そして、松陰先生の言葉に託された思いや考え、信念といった部分に思いを馳せることができれば幸いです。

一人を育てる

一人ひとりの個性を尊重し、可能性を信じて待つという姿勢が、基盤として感じられます。そして、「福堂策」の中で顕著に見られるように、その人なりの持ち味を高める、決して見捨てないという表現に、限りない人間愛を感じます。

○人賢愚ありと雖も、各々一、二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず

全備する所あらん。

【解説】人間には賢愚のちがいはあるが、どんな人間にも一つや二つのすぐれた才能(特性)を持つていない人はいない。その個人の特性を全力を傾けて大切に育てていくならば、その人なりの持ち味を持った人間として高めることができるのである。

【出典】「福堂策上」(野山雜著)安政二年(一八五五)六月一日二十六歳(撰集P二七八、全集第二巻P一六八)

(備考)「福堂策上」のはじめに「元魏(後漢)の孝文、罪人を久しく獄に繋ぎ、其の善思を生ぜしむ。因つて云はく、『智者は圜圉(牢獄)を以て福堂とす』と。」とある。松陰先生はこれを参考にして、「余是において一策を画す」といって、人間観として前出の語録を書いている。この考え方が「人物を棄遺せざるの要術、是より外復たあることなし」と明言している。松陰先生の人間を育てる基本理念である。「孟子」の「性善説」に通じる。

また、「福堂策下」にある「罪は事にあり人にあらず、一事の罪何ぞ

遽かに全人の用を廃することを得んや」という言葉にも留意したい。

○養の一字最も心を付けて看るべし。

【解説】「養」の一字に最も注意してみるべきである。

【出典】「講孟余話」離婁下第七章安政二年(一八五五)十一月十一日二十六歳(撰集P三〇四、全集第三巻P一七四)

(備考)この後に朱子の「養とは涵育薰陶しては其の自ら化するを俟つを謂ふなり」(孟子集註)を引用している。そして、「涵はひたすなり、綿を水にてひたす意なり。育は小児を乳にてそだつる意なり。薰は香をふすべ込むなり。」さらに「仁義道德の中に沐浴させて、覚えが知らず善に移り悪に遠ざかり、旧染の汚自ら化するを俟つことなり」という言葉が続く。この語録は、松陰の個別指導についての考え方の基本となっている。

※『吉田松陰語録集』拾い読みその二は、会報「松門」第五十号に続編として掲載します。

萩市の小学校における松陰教學の推進について

「松陰読本活用資料」作成をとおして

山口県教育会萩支部 副事務局長 田中 正己

はじめに

萩市立の小学校や中学校において、「松陰読本」の活用や「松陰先生のことば」の朗唱など、郷土の歴史を生かした教育を推進していることをご存じの方も多いことと思います。特に明倫小学校では、「松陰先生のことば」を毎朝朗唱しています。朗唱文は、各学年の学期ごとに十八文を決めており、各学期の朗唱文に対して、自分の「めあて」を設定し実践に向けての取組を継続しています。また、「松陰読本」を活用して吉田松陰先生の生き方や考え方を学び、日々の生活に生かすための学習をしています。同様の取組は、萩東中学校区、または萩西中学校区内にある明倫小学校をはじめ椿東小学校、椿西小学校、白水小学校においても推進しています。



萩市教育委員会

一方で、平成十七年の広域合併により、旧萩市地域以外の小学生や中学生も同様の学習ができるように支援することが課題となっています。

そこで、山口県教育会萩支部として萩市内のどの学校でも松陰教學の推進が可能となるような支援をしようと考え、「松陰読本活用資料」を作成しました。ここにその取組を紹介いたします。

萩市における松陰教學の歴史

ここで、改めて萩市の松陰教學について振り返ります。

萩市の松陰教學の中核となるのは「松陰読本」と「松陰先生のことば」です。

「松陰読本」は、昭和三十四年（一九五九）に明倫小学校社会科研究部の教員が編集したのが始まりです。その目的は、「郷土の偉人吉田松陰の生涯とその業績を後世に伝え、現代に生かす」というものでした。その後、明倫小学校松陰読本研究委員会による数度の改訂を経て、昭和五十五年（一九八〇）に萩市教育委員会松陰読本編集委員会が再編集し、八月四日（吉田松陰の誕生日）に山口県教育会が新版を刊行しました。現在は、

萩市教育委員会から萩市内小学校の四年生に配付されています。総合的な学習の時間に「不易」といえる吉田松陰の生き方・考え方を学んだり、吉田松陰について調べたことをまとめて発表したり、また松陰神社で実際に観光客にガイドをしたりする学習に取り組んでいる学校もあります。さらに、「志」ファイルを活用し、小学校の「二分の一人式」や中学校の「立志式」で、自分の「志」を発表し合っている学校もあります。

「松陰先生のことば」は、明倫小学校で昭和五十七年（一九八二）に現行の朗唱文が決定し、毎朝「松陰先生のことば」を朗唱するという朗唱教育が始まりました。ねらいは、「（前略）郷土の先覚者吉田松陰先生に誇りをもち郷土を愛する心を育てる」「松陰先生の生き方に学び、より高い自己実現への意欲を高める」のほかに「早朝の朗唱により心の安定を図り、落ち着いた気持ちで（後略）」という教育効果も期待されています。採用した朗唱文は、吉田松陰の著の中から「人の本性の善なること、信念をもって正しく生きることの大切さ」「読書の大切さ」「人としての生き方を考える大切さ」などを学ぶことができるもの十八文を選択し、各学年各学期に一文ずつを割り振りました。この明倫小学校の朗唱文をもとに、独自の朗唱文を取り入れて

いる学校もあります。松陰教學の現状と課題

先にも述べましたが、萩東中学校区、萩西中学校区内の小学校での取組は比較的進んでいます。その他の小学校とは温度差があります。その要因として、特に旧萩市地域以外の小学校では、すでに各地域で学ぶべき郷土学習が設定されており、校区内に吉田松陰関係の史跡等がない場合も多く、吉田松陰に接する機会が少ないことが挙げられます。また、旧萩市地域内外にかかわらず、小学校教員に萩市出身の者が圧倒的に少なく、教員自身が吉田松陰に接する機会が少ないという現状もあります。

一方で、私自身が萩市の小学校教員として勤務する中で感じたのは、教職員の一定数は松陰教學に取り組んでみたいと思っているということです。萩市の子どもたちの中には、中学校や高等学校を卒業すると一旦萩市を離れて生活する者も多く存在します。教員たちは、その子たちが将来生活する場所である萩のよさを語れるように育ってほしいと願っています。その中で、吉田松陰の生涯を知った上で「松陰先生のことば」を朗唱できたり、松陰先生の生き方を自分の生き方に生かしたりすることができれば良いと考えています。しかし、教員自身の「吉田松陰の話をするのは難しい」「松陰読本の内容を理解

して子どもたちに教えるのは難しい」というイメージから松陰教学には接しにくいと考える教師が多い要因ではないかと思われます。そこで松陰教学のハードルを下げたいという思いから山口県教育会萩支部が「松陰読本活用資料」を作成した次第です。吉田松陰が言うところの「道は即ち高し、美し、約なり、近なり。人徒らに其の高く且つ美しきを見て以て及ぶべからずと為し、而も其の約にして且つ近く、甚だ親しむべきを知らざるなり。（講孟劄記・序）」という考えを伝えたいと思います。

「松陰読本活用資料」の作成

松陰教学の推進を支援しようという取組は、長年続けてきたものです。平成二十九年（二〇一七）には故弘長純忠氏（元松風会理事・前萩松朋会会長）が「松陰読本・手引き書」吉田松陰の生涯と業績」を執筆し、松風会から発行されました。弘長氏は発刊のことに本書の活用方法を「指導する教師・両親等が（中略）児童の能力や興味・関心等を考え、適切な資料を取捨選択して指導してほしい。」と示しています。

一方で、吉田松陰に接する機会の少ない教員には取捨選択すること自体に困難があることも確かです。また、歴史的な事実や難解な語句にも抵抗があるものです。そこで、本活用資料を作成する手始めとして語句

の解説を行うこととしました。

「松陰読本」は全九章で構成されています。萩市内小学校の四年生に配付されることから、卒業するまでの各学期に一章（一時間）ずつ読み進めば吉田松陰の生涯と業績に接することができるとしています。そこで、萩支部の会員の中から小学校勤務経験者十名を選出し、「松陰読本」全九章を分担して手引きの作成に取りかかりました。

ベースとしたのは、以前から明倫小学校で活用されている「松陰読本展開例」です。これには各章の「主題設定の理由」、「ねらい」、「展開」が記載されているので、ここに語句の解説を追加しました。

解説に記載したことは、①小学生には難解な語句についての注釈、②またそれに付随したエピソードや特に関心しておきたい歴史的事実など、③国語辞典や「松陰読本・手引き書（弘長氏執筆）」で調べたこと、④インターネットで調べたことなど、できるだけ広くアイデアをもち寄って掲載することとしました。とはいえ、全員が吉田松陰の生涯や業績に詳しい者ばかりではないので、萩松朋会の会員が内容を検証し、推敲や加筆を行いました。完成した「松陰読本活用資料」は、本年九月に萩市の全小学校（小・中学校の小学部を含む）に電子媒体として配付しました。

松陰読本活用資料



令和7年(2025年)9月

山口県教育会萩支部

一方、私自身が「松陰読本」で授業を行った経験から、子どもたちが文字情報やわずかな写真、図などから吉田松陰が生きた時代背景や物語をイメージできないという課題もあると感じていました。そこで、萩市が平成三年（一九九一）に発行した漫画「若き志士」を活用しました。この漫画を授業で提示すると、子どもたちの理解がさらに深まったという実感があります。この漫画の画像をデジタル化し、ロイロノート（授業支援クラウド）で活用できるようにすれば、いつでも、どこでも、誰でも、気軽に「松陰読本」を活用した松陰教学ができるようになると考えます。

おわりに
「松陰読本活用資料」の発行にあたり、柳林浩一氏（前山口県教育会萩支部支部長）は次のように述べています。

「（松陰読本に）目をとおしてみると、小学生には少し難しいと思う語句や補足しないと小学生には歴史的な背景が理解できないだろうという箇所もあります。そのあたりを先生方がこの活用の手引きをもとに噛み砕いて伝えながら、子どもたちと一緒に読み進めていくことで、子どもたちの松陰先生への理解が深まっていくものと思っています。まずは、松陰読本を読み物資料としてしっかりと使い、松陰先生の考え方や生き方にふれることからスタートです。そのためにも、先生方が松陰読本に親しみ、大切にしていたことを子どもたちが大切にされると、きっと子どもたちも大切にしたいと思います。」

私たち山口県教育会萩支部では、このような思いのもとで、若手教員や高校生が松陰教学に親しむ機会も設定しています。毎年八月に実施している「子どもが学ぶ松陰先生」は、小・中学生を対象に吉田松陰ゆかりの史跡を探索して吉田松陰への理解を深める行事です。その講師を萩市内小学校の若手教員と萩高校文芸・新聞部員に依頼し、吉田松陰に少しでも親しもうとする人材の育成を図っています。

今後も、萩市の小学生、また教員に対して「松陰読本」に親しみ、大切に、松陰教学を推進する支援ができるような取組を継続していく所存です。

第十五回松陰研修塾基礎コース第三回 講座一 講義内容
「福堂策」に見える松陰先生の
人材育成を今とつなげて考える

公益財団法人松風会 理事

田村知津子



「今」そして「これから」の人材育成と松陰先生

今、この「松門」を読んでおられる方々は、学生時代、どのようなスタイルの授業を受けておられたであろうか。

私が高校生、大学生であった一九七〇年代、私の受けた授業の大半は、いわゆる知識伝達型の講義形式の授業だった。県立高校の教員として講義をする立場になった頃の自分の授業も、自らが受けた教員主導型の講義形式中心だったと記憶している。

それから五〇年、現在、大学で教員養成に携わる私の授業の多くは、「アクティブ・ラーニング」と呼ばれる双方向型の授業を取り入れている。「教師が教える」から「学生が学ぶ」への転換、学生が授業中に如何に考え、活動し、学び取ったかを重視する能動的な学習スタイルである。最近盛んに行われるようになったPBL（課題解決型学習）やフィールドワーク、グループ・ディスカッションやプレゼンテーション、模擬授業等がこれにあたる。

この「アクティブ・ラーニング」は、文部科学省の中央教育審議会が二〇一二（平成二四）年に発表した「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）あたりから論じられるようになった。この答申には、その学びの姿と意義について「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒にあって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習」とある。

それでは、なぜアクティブ・ラーニングなのか。それは、社会の仕組みの大きな変容、これまでの価値観の根本的見直しという時代の要請の中で、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力等が求められるようになったことが考えられる。

現在は大学はもとより、小・中・高等学校でも日常的に導入されているが、二〇一七（平成二九）年に告示された小・中・高校の現学習指導

要領では、この「アクティブ・ラーニング」は「主体的・対話的で深い学び」と呼ばれている。

さらに、二〇二二（令和三）年発表の中教審答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」には、今後めざすSociety5.0（一人ひとりの人間に合った幸せ Wellbeing を実現できる人間中心の社会）の実現に向けた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な学びが提唱されている。

このように、十年前から令和のコロナ禍を経て、二〇三〇年の社会を見据えた教育界の新たな展開を見る時、松陰先生の教育について関心がある方なら、改めて、松陰先生の教育や人材育成の実践をたどってみよとされるのではないだろうか。

福堂策が書かれた安政二（一八五五）年までの五年間の松陰先生の行動を振り返る

松陰先生は、嘉永三（一八五〇）年、二一歳での九州遊学を皮切りに、二五歳で野山獄につながれるまで、江戸遊学、東北遊学、二度目の江戸遊学と、自らを直接学びの地に運んで見聞を広め、先哲との対面を重ねながら思索を深められた。浦賀沖で黒船を遠望観察した後は、佐久間象山の勧めもあって海外渡航を決意し、

長崎ではロシア艦乗船を計画、下田踏海ではペリーとの対面の機会は得たものの失敗して江戸伝馬町牢屋敷に投獄され、萩に監送後、野山獄に移された。安政元（一八五四）年十月（松陰二十五歳）のことである。

この、「やむにやまれぬ大和魂」に突き動かされるようにして行動し、学びを広げ、深めていく松陰先生の姿が「主体的で、対話的で、深い学び」の実践そのものであるように思えるのは、私だけではないだろう。

「福堂策（上・下）」を読む

獄中の松陰先生は、それまでのような自由な移動は阻まれたが、読書に励む傍ら、「孟子」の講義を始める。また獄内の囚人同士、書に優れた者、俳句の得意な者などそれぞれが互いに師となり弟子となつて学び合うなど、いわゆる獄中教育に励む一方、講孟余話、獄舎問答、江戸獄記、福堂策（上）（下）など多くの著書を執筆した。

「福堂策」（上）は、安政二（一八五五）年六月に、伝馬町の獄や野山獄での体験を基に、牢獄を福堂にするという獄制改革案を提案したものであるが、そこには松陰先生の人材育成の優れた一面も窺える。

余獄に在ること久し、親しく囚徒の情態を観察するに、久しく獄に在りて悪徒を工む者ありて善思を生ずる者を見ず。然らば、滞囚は決して善治に非ず。

故に曰く、「小人閑居して不善を為す」と、誠なるかな。但し是れは獄中教へなき者を以て云ふのみ。若し教へある時は何ぞ其れ善思を生ぜざるを憂へんや。曾て米利幹の獄制を見るに、往昔は一たび獄に入れば、多くはその悪益々甚だしかりしが、近時は善書ありて教導する故に、獄に入る時は更に転じて善人になると云ふ。是くの如くにして始めて福堂と謂ふべし。

囚人をいたずらに獄につないでおくだけでは「善思」は生ぜず、アメリカの獄制のように教育と学びによつて更生を促すことで牢獄が「福堂」となると述べ、この文章の後に十項目の具体的方策を提案している。

例えば、囚人中から志と学問のある者をリーダーに選び、自治を任せ、読書や書写、学芸を奨励する。巡回時には囚人たちの声を十分に聴きとる。医者や急病の場合は来診を実施する。獄中共通の規律や業務を明確にするなど、全ての囚人の人権が尊重され、成長できる場所となるよう提案がなされているのである。

余野山獄に來たりてより、日々書を読み文を作り、傍ら忠孝節義を以て同囚と相切磋することを得、獄中暇々乎と

して化に向ふの勢あるを覚ゆ。是れに因りて知る、福堂も亦難からざること。

私は野山獄に来てからというものの、毎日書を読み文を書き、その傍ら忠孝や節義について同囚とともに学び合い、互いの考えを磨き合ってきた。その結果、獄中が急激に変化していくのを感じた。これによって、獄中が福堂となることも決して難しいことではないということを知ったというのである。



且つ人賢愚ありと雖も、各々一、二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん。是れ亦年来人を閲して実験するところなり。人物を遺棄せざるの要術、是れより外復たあることなし。

人は誰も一、二の才能は持つており、それを全力で伸ばすことで一人前の立派な人間になれる、人材育成

の上でこれが最も重要な方法である、と松陰先生は、確信をもって述べている。個々の才能への信頼と尊重が窺われる。

福堂策（下）には、次のようにも書いている。

政を為すの要は、人々をして鼓舞作興して各々自ら淬勵せしむるにあり。それ罪は事にあり人にあらず。一事の罪何ぞ遽かに全人の用を廢することを得んや。

余常に近世士道の衰頹を嘆ず。（中略）然れども人斯の性なきはなし。斯の性あれば斯の情あり、斯の性情ありて而も且つ自棄する、豈に其の甘んずる所ならんや。誠に萎靡壞敗、自ら奮ふこと能はざるに坐するなり。

政治を行う上で重要なのは、恐怖心や罰を与えることによつてではなく、人々が自ら心を奮い起こして自発的に努力するようにすることである。罪は行為にあり、その人自身にあるわけではないから、一つの間違ひによつて簡単にその人全体を全否定するのではなく、彼らの潜在的な能力を見込んで再起の機会を与えることが大切であると述べている。

また、人は誰もが武士道や奮発心を持つていている。もしその人が捨て鉢になつていたら、それは、彼

らが本当に、心が萎えくじけて、自分を奮い立たせることができない境地に身を置いているのであると、環境の大切さにも言及している。

松陰先生の人材育成を今とつなげる

今回取り上げた「福堂策」に見える人材育成のあり方は、勤務先の大学の一人のゼミ生と討論しながら整理した内容の一部である。もともとその学生の関心はビル・ジョージのオーセンティック・リーダーシップ論にあったのだが、福堂策の一端を紹介し、原文の書写と辞書だけで読み取ることを推奨したところ「獄舎問答」にも広がり、最終的にそのゼミ生の卒論テーマは「野山獄における吉田松陰の人材育成」が中心となった。卒業後、地域行政に携わる彼は、その論文の最後を「私が調査してきたことは松陰が残した文献のほんのわずか」だが、「松陰が唱えた人材育成に関する知見を自分も含めて若い人に知ってもらうことができればと強く願う」と結んでいる。

五年後、生誕二百年を迎える松陰先生の教育論が、若者たちに受け継がれていくことは松風会に身を置く私の強い願いでもある。

吉田松陰による烈婦登波の顕彰

その人間観を探る

公益財団法人松風会 理事 藤本 和義

吉田松陰は、明治維新の立役者となった幕末志士をたくさん排出した松下村塾の主宰者として有名ですが、当時最も低い身分として差別された宮番の妻であった登波の顕彰に努力し、最後には平民の身分に加えることに成功したという、当時としては類い希な人間観の持ち主でもありました。

ここでは、吉田松陰が、「烈婦」と称された登波の顕彰に尽力した経緯と、差別することが当然であった江戸時代において、身分や性別にとらわれないで、人の値打ちそのものに向き合った松陰の人間観について探っていきます。

一 惨事と敵探索の旅

登波は、長門国大津郡角山村の山王社宮番幸吉の妻でした。文政四年（一八二二）冬、登波の実家滝部村八幡宮境内において惨事が起こりました。夫・幸吉の妹の離婚話後、妹の夫であった枯木龍之進により、登波の父・弟・義妹を殺害され、幸吉が傷つけられたのです。

自宅にいて災難を逃れた登波は、



八幡宮境内にあった甚兵衛屋敷跡地

長らく夫を看病していましたが、夫の許しを得て単身で敵を追って、全国探索の旅に出ました。

探索すること十二年、ついに龍之進が英彦山（福岡・大分県境）にいるのをつきとめ、藩に帰り幕府に届け、指示に従い、天保十二年（一八四一）、事件後二十年にして、

めでたく敵討ちを成し遂げました。

二 登波顕彰の経緯

当時、親・兄弟の敵討ちは、義拳としてたたえられていて、安政三年（一八五六）藩主もその孝義を表彰しました。松陰が登波と関わったのは、安政四年（一八五七）登波五九歳のときでした。当時、先大津宰判の代官になった周布政之助が、この登波の快拳を後世に伝えたいと思い立ち、顕彰碑建立を計画し、その碑文を松陰に依頼したのです。

松陰は登波の孝義に感激し、一か月間、碑文の試作に専念して書き上げました。そして、書き尽くせなかった内容を「討賊始末」にまとめたのです。

その中で、「彼の幸吉夫妻の所為（行い）は、天晴大和魂の凝固せる士大夫にもはじざる節操なり」と、たたえています。

また、松陰は、絵の上手な塾生松浦松洞に、人物画なら優れた人物を描くべしと、登波の元へ走らせています。

その後、登波が夫・幸吉のことで津和野へ向かう途中、松陰は杉家に立ち寄らせ、面談し一泊させています。松陰が書いた碑文や「討賊始末」の内容についても、確認したのです。松陰は、親元である杉家での幽囚

生活の状態でありながらも、士族の身分であります。烈婦とたたえる人物ながら、被差別部落民を立ち寄らせるという行為は、当時の掟に反するものと言っても良いでしょう。松陰だけでなく、これを許した杉家の両親も、さすがの人物といえます。

登波は、帰途にも近くの上野に宿泊し、人々の面接や贈り物を受けました。松陰は、塾生に対しても登波を顕彰し、強い感銘を与えました。

三 平民に改める働きかけ

松陰は、碑文に「夫妻は宜しく永く其の宮番の職を免じて、良民（平民）に齒する（ならぶ）ことを得しむべし」と。審議慎重、月日可すを得たり」と、日付を入れるように試作しましたが、このことは前例がなく実現は困難を極めました。

藩府は当時の郡方元締佐藤寛作に考えをたずねると、「前例はないが中国では昔、松の木にさえ五大夫の爵（高い位）を与えている。最も低い身分とはいえ、人間であれば当然特別なばかりいを考えてよいのでは」と、ただ一人賛成しました。

松陰は、「佐藤寛作答語甚だ好し」と、喜びましたが、藩府は一笑するにとどまり、認めませんでした。しかし、松陰はあきらめずに努力して、ついに安政五年（一八五八）冬に、

平民への実現を果たしました。
敵討ちによる孝行を成し遂げたとはいえ、最も身分の低い宮番の妻である一女性に対し、これほどまでに全力を注いで顕彰した松陰の行いは、身分・性別にとられない優れた人間観として高く評価されて当然といえるでしょう。

ちなみに佐藤寛作は、兄弟で総理大臣となった岸信介・佐藤栄作の曾祖父に当たる人物です。

四 塾生への影響と顕彰碑建立
さて、この登波顕彰碑建立の話は、周布政之助の失脚により立ち消えてしまいましたが、松陰の死後も、塾生は教えを大切にしました。文久元年（一八六一）久坂玄瑞主宰の「燈銭申合」には、この「登波碑建立」のことが挙げてあります。

また、文久三年（一八六三）高杉晋作の奇兵隊結成に対し、吉田稔磨が「屠勇取立」の建策をしました。



「免其宮番職得齒良民」の文字が見える
(三の冒頭を参照)



大正5年に建てられた顕彰碑

これは、最も身分が低い差別された人々に、士分の役目を代行させるという前例のないことで、藩府は、稔磨を「屠勇取立方」として編成を手がけさせました。後に、維新団・一新組等が結成され、第二次長州征伐の小瀬川口戦で、勝利を導く戦功を挙げました。松陰の優れた人間観は、塾生に受け継がれ、新しい夜明けを導きました。

なお、この登波顕彰碑建立の一件は、長らく忘れ去られていましたが、大正五年、下関長府の桂弥一の進言に従って、地元の名士中山太一の寄付により、滝部八幡宮境内に建てら

れました。

五 松陰の人間観をたどる

松陰の登波顕彰に関する行動は、たまたまの行動というような性質のものではなく、確かな人間観に基づいた行動であると考えられます。それを示すものとして以下に列挙します。

①「東北遊日記」（嘉永五年一八五二）から

佐渡金鉱山で働く鉱夫の死を早める過酷な重労働に驚愕し、「嗚呼、之れを語るも亦以て金を視ること糞土の如き者の膽を寒うすべし。」と、金を湯水のように使って贅沢をする人々に対して、心から憤慨しています。

津軽半島でのアイヌの人たちへの差別についても、「奸商の夷人（アイヌ）を待つ（待遇）は、則ち蓋し人禽の間を以てすといふ。噫、惜しむべきかな」と、悪徳商人がアイヌの人々を人間扱いしていない現状について、ひどく憤慨しています。

②「回顧録」（安政二年一八五五）から

下田で米艦乗船に失敗し、囚われの身となり、萩へ護送されました。三島の宿では、三〇四人の被差別部落の若者が、松陰の説話に聞き入りひどく感動しているのを見て、「去るにのぞみて甚だ恋々たり（思い焦

がれてあきらめきれない）」ほどであったと言っています。「余生来の愉快、この時に過ぐるはなし」と述べ、その若者たちを「その氣視るべし」とたたえています。

③「福堂策」（安政二年一八五五）から

萩に護送されて、士分の獄である野山獄に投獄されましたが、囚人は松陰のほかに十一人。この内、親戚からの借牢願い（厄介者扱いされ、裁判もなく在獄年数も定まっていな）による者が九人もいて、明らかに藩の掟を破って投獄された者は二人でした。そのため、獄風は荒れて囚人たちは争いの多い毎日でした。その囚人について、「罪は事にあり人にあらず、一事の罪何ぞ遽かに全人の用を廃することを得んや・・・罪はなお疾の如きか」と、囚人たちを深く理解し心を通わせて共に学ばせ、野山獄開設以来の獄風の大刷新を行いました。また、「人賢愚ありと雖も各々一、二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん」と言い、値打ちのない人間は一人もいない、軽々しく見捨てない、成長を信じて・・・と。

松陰の人間観には、時代を超えて今日の人間尊重に通じる見方・考え方がありと感ずるものです。

シリーズ

吉田松陰遊学の旅路

松陰は、「地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ。」との言葉どおりに、長崎、熊本から、江戸、そして東北の青森に至るまでの旅をし、道々の地理を極め、多くの人々に出会いました。その中で、学問や思想を深めながら、国の行く末を考え、今何をなすべきかを思索

第一回江戸遊学く松陰先生が訪れた浅草天文台

公益財団法人松風会 理事長 松本 芳之

嘉永三年十二月(一八五〇)九州遊学から帰国した松陰先生は、翌年嘉永四年三月五日、藩主の参勤交代に際し、江戸遊学の十七名の中の一人に選ばれ、初めて随行者として江戸へ出発することとなった。随行者とは言っても、他の私費遊学の人々と同様に直接藩主の行列には加わらず「冷飯」、つまり食客の体裁をとって、行列の少し前、希に行列の後を追う形で江戸へ向かったのです。

松陰先生は、四月九日、三十五日間の旅程を経て、現在の日比谷公園にあたる萩藩上屋敷桜田藩邸に到着した。江戸では、早々に諸方の学塾に学ぶため、次の各先生を訪れ、入門教授を願っている。安積良斎(朱子学者。陸奥二本松の人。昌平坂学問所教授。長州藩上屋敷の有備館教授。古賀茶溪(幕府の儒官。昌平坂学問所教授。海外事情に明るく、洋学の知識が豊富。山鹿素水(山鹿素行六世の孫。津軽の人。平戸の山鹿家と共に山鹿流兵学の宗家。佐久間象山(信州松代藩士。洋学、兵学、

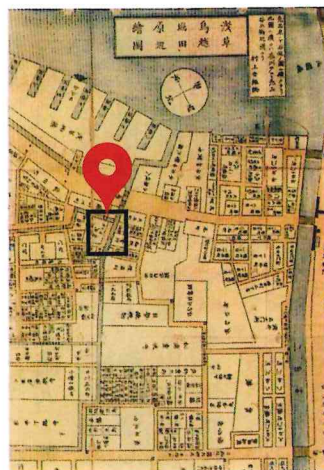


浅草天文台跡(蔵前橋一丁目)

砲術学の知識が豊富。)

その中で、江戸到着後、まもなく浅草天文台を訪問していることは、大変興味深い。嘉永四年五月五日「父叔兄宛」書簡には、「天文臺へも此の内参り申し候。松本父子(藩の天文曆教師範家) 毎々来たり候」と

探求していったのです。また、松下村塾の授業では、机上の学問のみに終始することを好まなかった松陰は、実学を重視し、歴史や兵学の講義をする際、積極的に地図を活用したとも語られています。本コーナーでは、幕末期に希な旅行家の一人ともいわれる松陰遊学の足跡をシリーズで辿りながら紹介します。



浅草天文台跡(蔵前橋一丁目)

あり、また、同年五月十四日「辛亥日記」には、「古賀茶溪先生増如川に見ゆ。天文臺に至る。」とある。

浅草天文台の始まりは、貞享元年(一六八四)、従来の「宣明曆」(中国の太陰太陽曆)に変わる「貞享曆」(時代経過による誤差及び中国と日本の経度差を補正した和曆)が出ると、江戸幕府は天文方を新設し、「貞享曆」の制作者である洪川春海をこの役職に就けたことに由来する。それまで、編曆作業は朝廷の陰陽寮が行っていたが、天文方の設置に伴い移行された。正確な曆を作るには観測するため天文台が必要であり、翌年、牛込藁町に「司天台」を設置している。その後、天明二年(一七八二)、浅草鳥越に「頒曆所御用屋敷」として移設された。ここは、編曆・

天文・測量・地誌・洋書翻訳等を専門の職務としており、当時の最先端の学術機関とも言える場所であった。

この「天文台」への訪問について、福本義亮氏は著書の中で、「松陰」先生は嘉永四年五月、江戸着早々天文臺まで踏み込み、是れが研究をなされた様である。此の松本彦右衛門及び其の子源四郎といふは何れも藩の数学天文の業家であつて明倫館にも関係して居た人であつた」(吉田松陰の殉国教育)と記している。

浅草天文台は、現在の台東区浅草橋蔵前橋一丁目交差点の歩道付近にあり、ビル街に囲まれた公園となっている。当時、天文台は築山の上に建てられており、東と南は川辺のある低地へと続き見通しが良く、観測に適していることから、天文台用地として選ばれたものである。現在、築山は崩されておきその面影はない。この地名の「鳥越」が示すように、東側に隣接して隅田川があり、その水鳥がこの付近の丘陵地を朝夕に飛び越えた場所に由来するらしい。

なお、伊能忠敬は、この天文台で幕府天文方高橋至時の弟子となり、測量学を修得し、日本全国図の作成にあたった。至時は、

忠敬の最初の蝦夷地測量に当たって幕府に許可を得たり、測量中に問題が起こった時に助言を与えたりするなど、測量事業へ支援を行った。忠敬の没後、彼の実測をもとに至時の子高橋景保らによって「大日本沿海輿地全図」が完成する。

【天文台跡】

江戸時代後期に、幕府の天文・暦術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などを行う施設として、天文台がおかれた。天文台は、司天台・浅草天文台などと呼ばれた。その規模は、『司天台の記』という史料によると、周囲約九十三・六メートル、高さ約九・三メートルの築山の上に、約五・五メートル四方の天文台が築かれ、四十三段の石



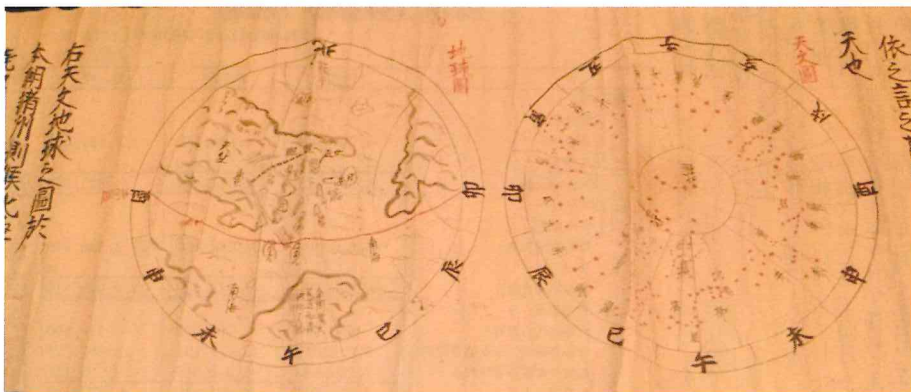
「鳥越の不二」の絵図

「富岳百景一三編」国会図書館蔵

段があった。また、別の史料『寛政暦書』では、石段は二箇所に設けられ、各五十段あり、築山の高さは九メートルだったという。

幕末に活躍した浮世絵師、葛飾北斎の『富嶽百景』の内、「鳥越の不二」には、背景に富士山を、手前に天体の位置を測定する器具が描かれている。この球体は「簡天儀」といい、天体の角度などを測定する「渾天儀」から黄道環を取り去って、簡略化したものである。

浅草天文台は、天文方高橋至時らが寛政の改暦に際して、観測した場所であり、至時の弟子には、伊能忠敬がいる。忠敬は、全国の測量を開始する以前に、深川の自宅からこの天文台までの方位と距離を測り、緯度一分の長さを求めようとした。また、至時の死後、父の跡を継いだ景保



「天文地球図」個人蔵

の進言により、文化八年（一八一二）天文方内に「蕃書和解御用」という外国語の翻訳局が設置された。これは後に、洋学所、蕃書調所、洋書調所、開成所、開成学校、大学南校と変遷を経て、現在の東京大学へと移っていった教育研究機関である。天文台は、天保十三年（一八四二）九段坂上（現、千代田区九段北）にも建

てられたが、両方とも、明治二年に新政府によって廃止された。

（参考：「現地天文台跡説明板」等による）

嘉永四年八月、江戸から兄の杉梅太郎宛て書簡に、「輿地学（地理学）・砲術学・西洋兵学書算術」等も「一骨折れ申すべし。」と記しており、諸方の学塾以外に天文台などでも西洋の最新の情報・知識を得ようとしたことを示している。松陰先生の向学心とその興味・関心は、幅広く多岐にわたっていたのである。

松陰先生は、安政五年十二月（一八五八）「学校を論ず附、作場（実習棟付き工科学校）」において、「一に曰く学校を奮はす、一に曰く作場を起す」と述べ、「その師表たるべき者」として、「兵農暦算、天文地理、諸種の学芸の自ら長とする所を扶ける者を募り」と記している。新しく設置する学校の教師には、兵学、農学、暦学、算術学、天文学、地理学等に優れた者を教師として登用すべきとの考えを示している。松陰先生は、国を豊かにし、欧米列強からの侵略を防ぎ、我が国の産業・軍事の技術を発展させ、ひいては欧米と肩を並べるために、天文台で取り扱う最先端の学術的専門知識である「暦学、算術学、天文学、地理学」等の技能を有する人材の育成が、我が国に急務であると認識されていたのである。

